



梅雨は東海地方まで明けたが、関東地方は足踏み状態。梅雨は「小笠原高気圧」と「オホーツク海高気圧」の気団の押し合いだが、まだ北の高気圧が頑張っているので、関東地方には冷涼な北東気流が流れ込み、しばらく曇天が続く見込み。関東地方は先月の梅雨入り以来、雨が非常に少なく、また暑い日も多くて梅雨らしくない天候続き。先週は夏を待たずに各地の海水浴場で海開きが行われた。わが温室のトマトもすでに収穫寸前だ=写真。

22日は暦の上で「大暑」だったが、8月から

2016.7.24



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

関東地方の梅雨明け

が暑さの本番だ。最新の3カ月予報によると、暑い夏が予想される。8月の気温は平年並みか高めだが、注意すべきは9月。「平年並み」と「高い」を合わせた確率は80%で、「高い」が50%を占める。原因は赤道太平洋地方の大規模な対流活動の環境が「エルニーニョ」から「ラニーニャ」へと転換し始めていることにある。

エルニーニョでは対流域の中心が中部太平洋に留まるが、ラニーニャではこれが西に進み、インドネシア海域に移動する。そこでは高さが10数キロに達する「積乱雲」が発達し、上昇した空気は「対流圏界面」で頭を押さえられるため、それより上には昇れず、仕方なく北に向かい、日本の南海上で下降して「小笠原高気圧」を強める。強いラニーニャは日本列島全体に猛暑や深刻な水不足をもたらしかねない。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)

2016.7.31



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

リオ五輪

の集団として組織化され、大きな渦に成長したのが「熱帯低気圧」だ。「台風」は熱帯低気圧の最大風速が毎秒17m以上に発達し、北西太平洋の赤道より北、東経180度より西、あるいは南シナ海に存在するもの。同様の現象は世界各地にあり、呼び方は地域で異なる。

アメリカでは「ハリケーン」、インドやオーストラリアでは「トロピカルサイクロン」。しかし、ブラジル近海では熱帯低気圧は発生しない。発生には海面水温が約28度以上必要だが、ブラジル沖は他の海域に比べて低いことが主因だ。

現在まで台風はわずかに3個と記録的に少ない。地球温暖化に伴って、熱帯低気圧の発生数に顕著な変化はないが、巨大な台風の出現が指摘されている。この夏は台風の動向からも目が離せない。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)



関東地方もやっと梅雨が明けた。日本はこれから夏本番、台風もやって来る。一方、南半球を見れば夏季五輪がブラジルのリオデジャネイロで開催される。季節は北半球と正反対だから、これから真冬に向かう。冬に夏季五輪と思われるが大丈夫だ。リオデジャネイロは日本と異なり「亜熱帯」に位置しているため、真冬でも気候は穏やかだ。8月の平均気温は22度のようにだから、陸上競技にはちょうどよい季節だろう。

赤道地方では「積乱雲」=写真=などが発生・発達を繰り返している。それらが大規模な雲